すすめよう
木材の地域循環

株式会社今井産業
ウッドラック

株式会社 今井産業

2016年11月に東京ビッグサイトで開催された「インテリア・ライフ・スタイル展」に出品

青森県初となる新素材の波形ボード「e・wood＋」（イーウッドプラス）が誕生して4年。リンゴの剪定枝や間伐材などが原料の〝木の段ボール〟だけに「軽量」「丈夫さ」、加えて0・5㎜の薄板から透けて見える「木目の美しさ」が大きな特徴だ。素材の面白さに着目、「e・wood＋」のブランド化を目指しているパートナー会（家電販店など全国販売規模の中堅企業13社から成る）では、それぞれ店舗什器や家具・雑貨用品などの試作を進めている最中だ。

生みの親である㈱今井産業（平川市）の今井公文社長は2015年、「e・wood＋」の流通がスムーズにいくよう新会社のウッドメーカージャパン㈱を興した。そのホームページに、まったく予期しなかった一般消費者からの〝声〟が続々と寄せられているという。

これですよ、と今井社長がテーブルに写真を並べた。パソコンからプリントアウトしたA4サイズが3枚、いずれも照明器具である。一見、薄い紙で製作したかに見える筒状のものや、波形のピラミッドみたいなもの。天井に据え付けたエアコンのようなものまで、今まで見たこともない奇抜で色彩豊かなランプシェードばかり。これらが、実は、一般消費者が、「e・wood＋」を使って製作したものだと知って驚いた。

今井社長が興奮の口ぶりで話す。「東急ハンズで『e・wood＋』が部材として売られているんですが、それを購入した人たちが、『こんなモノを作ってみました』とウッドメーカージャパンに製作品の写真とコメントを添えて送信してくるんですよ。ほとんどが照明器具なのは、内側から光を当てると薄板の木目がきれいに浮かび出るので素材としてふさわしいからです。実は作品の写真を送る

『e・wood＋』の前途に新たな道
一般消費者からヒント、キットで販売

『e.wood+』で製作された奇抜で色彩豊かなランプシェード

のが目的じゃなく、板をカットするのに苦労したから、初めからきれいに切ってある部材、つまりキットとして販売してほしい――という要望なんですよ」

完成した商品として売るのではなく、〝半製品〟として売る。今井社長が続けて、「一般消費者はそれを望んでいるんですね。目からウロコでしたよ。限られた人数で考えを出し合うよりも、桁違いの人たちが思いもよらないアイデアを出す、それがネット社会のすごさなんですね」

今井産業のショールームに展示されている「e.wood+」

筒形の照明器具は、浮世絵にでも出てきそうな色あでやかな色彩だから、デパートなどで売られていたらたぶん「万」の単位が付くだろうと想像したが、聞いてまたまた驚いた。「照明の台に使っている金物も、胴体にゆるく巻いている黒く細い針金も百均から買ったんだそうです。筒にするために単板の端と端を接着剤でくっつけようとしたけどうまくいかないから、ハリガネで巻いてみたら却ってデザインのアクセントになった、と。だから、かかったお金は『e・wood+』の単板と百均の台とハリガネで合計何百円」。想像した金額から○が2つ減った。

ここにきて「e・wood+」の前途に、一般消費者のアイデアとコラボするという思いがけない〝販路〟が開けてきたようだ。

自然のぬくもり暮らしの中に
株式会社 今井産業

本　　社●平川市新館藤山16-1
TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568
http://www.nijiironomori.net
弘前常設展示場●弘前市泉野3丁目16-4
TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441
E-mail : llp-genki@clear.ocn.ne.jp
青森常設展示場●青森市富田4丁目12-22
TEL.017-752-0981

Wood rack
ウッドラック

『ウッドラックは明日(5月)からメンテナンスシーズンに突入!! まず遠方の脇野沢と大間へ煙突掃除に行ってきます!!』――Facebookで、のっけからハイテンションな〝!!〟連発のコメントはスタッフの石村真弓さんだ。『これから半年間は9割方〝爪が黒い状態〟が続きますが白い目で見ないでね』と、くすりと笑わせる。屋上での作業だけに陽に焼かれ、「サーファーですか?」と間違われることもあるとか。

ストーブのメンテナンスについて説明する石村さん(右)

相馬壮代表と石村さん、県内あちこち移動の日々でフェイスブックにまで手が回らないようだが、『ただいま19件終了!ほぼ毎日煙突掃除に走り回ってます』と久々に相馬代表から〝無事の便り〟が届く。

メンテナンスシーズンとはいえ、過密なスケジュールに新築現場への薪ストーブ設置もどんどん割り込んでくる。5月下旬には八戸市鮫町の現場にベルギー製のドブレー760CBJを運び入れた。据え付け、試運転するだけでなく、快適な薪ストーブライフを送れるよう、上手に燃やすための取り扱い説明が重要で、石村さんが額に汗をにじませながら1時間ほどかけてお施主様にじっくり説明した。

「燃やす前にいちばん大事なことがあります。薪が乾燥しているか、ということです。よく乾燥させておくことから薪ストーブは始まるのです」。薪が湿っていたり、送り込む酸素の調節などがうまくいっていなければてきめんに炉内や煙突内にススが付着する。

石村さんが、炉内に入れた〝親指〟ほどの太さの木に火を点ける。焚き付けだ。炎が広がったら、〝手首〟大の薪をくべる。全体に火が回ったら今度は〝二の腕〟大の薪を。火事みたいに炎が渦巻いていても実はトッププレート(天板)の温度はまだ手で触われるほど低いのだ。

燃え盛る炎がガスの火のように変化すれば二次燃焼へと移行する

「あ、ほんとだ」と触ってみた施主。燃え盛っていた炎の赤色がガスの火のように変化してくると薪が「熓(おき)」に変わった印で、そこから、薪の内部より染み出したガスが燃える二次燃焼へと移行する。

辞書で「熓」を引いてみたら、「炭や薪の全体が炎をあげないで燃えている状態」とあった。つ

薪ストーブの普及支える専門店
新規設置、メンテに県内走り回る

まり炉内で炎が燃え盛る初期段階を過ぎると、炭みたいな燠になって二次燃焼が始まるのである。天板の温度が40分後には２００度に達した。

「ここからが薪ストーブなんです。燠の状態を観察しながら薪を足したり、空気を調整したりして燃やします。遠赤外線効果で室内の木に熱が保温されて、火を消してもすぐには冷めない、薪ストーブ独特の柔らかな暖かさに包まれるんです」

シーズンが始まる前にストーブを２００度にまで３回上げてやるのは、ストーブ本体と煙突に含まれる水分を飛ばして〝結露〟を防ぐため――と石村さんが付け加えた。

『ウッドラックではメンテナンスの結果から最も上手に焚けていたユーザーにベストユーザー賞をプレゼントします』――と、久々に開いてみたＦａｃｅｂｏｏｋが更新されていた。『40件終わった現段階での暫定１位は南部町のＯ様で、ダントツでした』

地球温暖化防止と地域の木材資源有効利用――という大義を、ウッドラックは薪ストーブと一緒に担いでいるのである。

【お知らせ】…２０１７年中に浅虫の東消防署浅虫分署（国道４号沿い）の隣地に新店舗を建設、移転します。

昭和大仏の青龍寺そばにあるウッドラックの薪土場で2016年春に行われた「薪づくり」。上は斧を振り上げる相馬代表（右）、下はチェンソーのメンテナンスの手順を説明する石村さん（左）

薪ストーブと木の雑貨
Wood rack
ウッドラック
青森市自由ヶ丘1丁目2-13
TEL.017-752-0133 FAX.017-752-0134
E-mail : info@woodrack.jp
ウッドラック
オーナーズクラブマーク

県産材展示場『木魂館』開館
林業と地元木材の情報発信

青森空港に至る曲がりくねった坂道の手前、青森県木材協同組合（県木協、青森市高田）の入り口に、スギ丸太を立てた『木魂館（こだまかん）』の看板がお目見えした。てっぺんにフクロウが止まった、トーテムポールを想わせるスギ丸太に横字で『木魂館』、その下に縦字で『県産材展示場』とある。青森県の林業や、ヒバ、スギなどの県産材について情報を発信しようと青森県木材利用推進協議会（県木協内）が2016年に開設した拠点施設である。

県木協の入り口から敷地の奥に見えている平屋の建物が『木魂館』。木材の入札にも使用していた旧展示場をリニューアルしたもので、中には、ヒバを使った浴室や和室、スギを床と腰壁に張った洋室の縮小モデルが展示されている。また、「青森県の森林の種類」や「青森ヒバの魅力」「天然スギの北限は青森県」のほか、植林から始まって、伐採され、山から搬出されるまでの「林業の仕事」について解説したパネルも掲示されている。

「林業」という仕事の特徴は、街なかから遠く離れた「山」が仕事場であるということ。田園や畑地で作業する農業は身近だが、林業は普段目にしない山奥での仕事だけに意識からも遠い。その「山」へ、この『木魂館』を通じて意識を向け、林業の役割りに理解を深めてもらいたい、というのが開設の趣旨だ。

パネルの「林業の仕事」にはこう書かれてある。――『畑作農業では、春に種をまき、苗を植え、肥料を与えたり、雑草を除いたり、世話をしながら育て、夏から秋に収穫します。林業も同じように、苗木を植栽して、世話をしながら育て、収穫します。畑作農業は畑で行い、数ヶ月で収穫できますが、林業は山で行い、収穫（主伐）までに50年から60年程度の年月が必要です』。一生かけて育てた樹木を次の世代が収穫する、という気の遠くなるような時間がかかるだけに、人から人へきちんと引き継いでいかなければならない仕事なのだ。

『木魂館』を会場として、2016年には子供たちが角材をカンナで削る体験学習が開催され、また「山仕事・木の家見学バスツアー」の参加者も途中立ち寄って見学した。

県木協の最上猛専務理事は、「山の樹木を育てていくのと同様に、子供たちの心にも林業や地元の木に対する〝意識の種〟を植え付けたい。その〝場〟としてこの『木魂館』が役立てば」と話している。

〈メモ〉
青森県木材利用推進協議会
青森市高田字川瀬104-1
☎017-739-8761